

地域と共に社会貢献活動 杉並区立杉並和泉学園

齋藤 漠興氏（杉並区立杉並和泉学園 生活指導主任／主任教諭）

【2019年3月10日（日）合同報告会】

（１）杉並区立杉並和泉学園について

杉並和泉学園は、杉並区立初の公立の小中一貫校で、今年度私は、中学3年生の担任をしておりました。現在、中学3年生に2クラス計70名がおります。

本校の教育目標は4点です。その中でも「社会に役立つ人」というテーマを大切にしております。これに、中学3年生の今回の社会貢献活動をつなげて実施しております。

本校の生徒は地域に密着した子どもたちで、児童館の委員に関わる子どもも多く、とても地域に大切にされています。また小中一貫校なので、小学部の人間関係がそのまま中学部に持ち上がり、上下関係の垣根を超えて、子どもたちはとても仲がよいです。

ただ反面、短所もあります。9年間同じ人間関係でいきますので、世界が狭く、社会性が乏しくなってしまうています。また自己評価が低めで、初対面の人とのコミュニケーションも苦手です。こういったところを社会貢献活動によって視野を広げ、コミュニケーション能力を高め、「認められること」を通して、自信をつけてもらうことが一番のポイントです。

（２）社会貢献活動の位置づけ

本格的な活動は、平成24年度から、中学3年生の総合学習の取り組みとしての募金活動から始まりました。ただの街頭募金活動ではなくて、商店街のお店を個別に子どもたちが訪問し、募金をお願いするというものです。一步間違えば厚かましいやり方ですが、ここが大きな特徴になります。全体での募金活動ですと、どうしても目立つ子ややる気のある子が積極的にやり、そうでない子は後ろで立っていて終わってしまうということになりがちです。班単位で商店街を回ること、どの子にも話す機会、活躍する機会を用意し、自信をつける機会を作るようにしています。

時間は、中学3年生で全15時間を確保しています。商店街を回るとい活動が入りますので、事前準備から事後のことまでを含めるとどうしても時間がかかってしまいます。また、中学3年生には進路がありますので、時間数をあまり増やすこともできません。修学旅行などの行事もありますので、活動全体をできるだけコンパクトにしようとこれまで試行錯誤してきました。

（３）社会貢献活動の流れ

内容を具体的にご説明します。1つ目は、道徳の内容を社会貢献に繋げるようにしています。道徳の読み物資料の中にある、「国際理解」や「国際貢献」の価値項目を使い、社会貢献の事前学習をしました。2つ目は、事前に社会貢献についてのアンケートを子どもたちに取り、「世の中にはどんな困っている人がいて、どんな人たちを助けたいのか」ということを話し合わせました。こちらから何かを与えるのではなく、国内外を問わず、自分たちの頭で寄付先を考えさせました。時折我々教員が理由を聞いたり、揺さぶりをかけたりしながら、話し合いをさせました。その中で子どもからは、「日本は、必要最低限のことは自国の力で

【Ⅱ：学校の取り組み】

できているじゃないか」「海外には、命の危機が目の前に迫っている人たちがいる、そこは日本との大きな違いじゃないか」という意見が出ました。やはり海外の子どもたち、海外に対してお金を使うことで話がまとまりました。

目標金額は、例年の額を踏まえ20万円と設定しました。金額がそんなに多いわけではないので、「この金額でできることから考えよう」と子どもたちに振りました。すると子どもたちからは、「20万円という限られたお金を、難民の人たちの生活支援に役立てるには、ただ物資を送って使われたら終わり、ではいけない。そうではなくて、何か形に残ったり、ずっと使ってもらえるものに使おう」という意見が出て、その結果、難民の水支援に関して使うことになりました。

寄付先が決まってからは、募金のお願いの挨拶回りをしました。本校は、4つの商店街に囲まれた比較的恵まれた立地にありますので、商店街の方にご協力をお願いして、生活班毎に商店街の店舗を回り、挨拶状を渡して、募金のお願いをしました。2時間かけて挨拶回りをしたのですが、毎年活動のため比較的理解と協力を得られた一方、やはり中には、厳しい言葉を投げかけてくる店舗もありました。でも、子どもにとっては、それが社会勉強かなとも思います。事前に子どもたちには、「厳しいと言われるかもしれないよ？」「あなたたちが傷つくことをと言われるかもしれないよ？」と伝えていました。「でもお金を集めるということはそういうことなんだ」ということを説明してやらせました。

厳しい言葉の例としては、時期的にちょうど西日本豪雨があり、我々が支援先を決めた後に起こってしまったので、商店街の方にはかなり質問されました。また、「毎年同じようなところにしか支援してないのは一体何故なのか？」「なにか先生たちが決めているのではないか？」と生徒に投げかける方もいました。実際は、毎年生徒に考えさせているのですが、このことが商店街に伝わっていないことは反省点の1つです。

生活班12班で分担して、店舗を回りました。概ね非常に協力的だったのですが、土曜日のために忙しく、対応できない店舗さんもありました。駅頭での募金活動と合わせて行い、1時間半という限られた時間の中で子どもたちがどんどん積極的になっていく姿勢を見ることができました。保護者も募金をしてくれましたし、休みの店舗でわざわざ募金をしに来てくれたところもありました。

募金後は、班長が集計を行いました。金額は、目標を大きく上回る26万3900円を集めることができ

話し合いの様子



募金活動のようす



集計作業



【Ⅱ：学校の取り組み】

ました。最後に金額をはじき出した時には歓声もあがり「やったー」という声が教室中に響き渡りました。

最後に、寄付先のアドラジャパンさんに来て頂き、全校朝会で、贈呈式を行いました。寄付先の現地には、水飲み場を4箇所を作って頂き、医療施設の前の水飲み場にして頂いています。杉並和泉学園の学園章も付けて頂いています。目に見える形で、成果になったことを子どもたちも大変喜んでいます。また、お礼状をその後商店街の方にお渡しし、感謝の気持ちを示すところまできちっとやりました。お礼状を持っていった時に、実は、募金をした店舗で閉店していたところがあり、子どもたちもとてもショックを受けていました。商店街も、非常に苦しい中で、自分たちを助けてくれている、ということをも身にしみて理解した子もいたようです。

（４）子どもたちの学び

生徒の感想としては「ボランティアで誰かを助けることで、楽しさや達成感を味わえた」「チラシを受け取ってもらえなくても、その人が会釈をしてくれたり、ごめんねといってくれて、一つひとつのことにとてもやり甲斐を感じた」や「心からの『ありがとうございます』をこちらから言えた」など前向きな意見が多く、子どもたちにとっては達成感を得たことで、自信や自尊心の向上につながったと思います。また「世の中って色んな人がいる」ということを考えながら「案外冷たい人がいて残念だったな」という子もいました。また、小さなお子さん連れのお母さんから、「この子たちにわかるように説明して！そしたらお金出すから」と言われて、小さい子に膝をつきながら説明するという場面もありました。幅広いコミュニケーションを通して、人と関わる能力が向上し、視野も広がったと思います。また、地域の人の大切さを改めて感じ、地域に育まれているということを実感した子もいました。あとは「自分からやるのが大事」「お金をもらうのがこんなに大変だということが分かった」など、活動の中で子どもたちは自主的に動くようになっていきました。主体性や相手を思う気持ちが高まったこと、社会性の向上と捉えております。

（５）今後の課題

課題としては、進路を抱えた中学3年生でしたので、時間の確保がなかなか難しく、少ない時間の中でいかにこの活動を行なうかが重要でした。日本フィランソロピーさんに協力いただき、一緒に企画をしたり相談をしたりすることで、15時間という限られた枠の中での実施が可能となりました。それから、毎年必ずこの活動を実施していますので、例年のやり方が定着して来ています。教員たちも、わかっている教員が残っていれば、管理職が変わっても継続していける取り組みになっていると思います。

取り組み⑤

＜贈呈式の実施＞

全校朝会(小中合同)にて、社会貢献活動の説明と「ADRAJapan」への贈呈式を実施。



＜具体的な支援内容の決定＞

難民キャンプ内に建設された診療所の4カ所で、手洗い、水飲み場を設置



(了)

社会に開かれた教育課程の実践 江東区立深川第二中学校

高橋 良久氏（江東区立深川第二中学校 校長）

【2019年3月10日合同報告会】

私と日本フィランソロピー協会さんとの関係は、平成23年4月、江東区立有明中学校という新しい小中一体型の連携校の校長をさせていただいた時に始まりました。その年の3月11日に起きた東日本大震災で被災した生徒が、東北から江東区の復興住宅に何人か来ていて、その子たちのために何かできることはないかと考えていた所、協会から「チャリティーリレーマラソン」という事業を紹介され、ルートも本校の近くを通るということなので、参加しました。そこからの縁で、今日まで様々な取り組みをしてきました。

私は校長という立場なので、実際に私が子どもたちと何かをするというよりも、やはり先生方を通して活動することが多いです。私の思いが先生方に伝わるのが1番大事だと思います、色々な方面で投げかけています。ただなかなか理解されなかったり難しい部分もありましたが、これまで行なってきたことについて、お話したいと思います。

（１）社会に開かれた教育課程

新しい学習指導要領には、「社会に開かれた教育課程」が示され、「よりよい学校教育を通してより良い社会を作るという理念を学校と社会が共有し、それぞれの学校において必要な学習内容をどのように学びどのような資質の力を身につけられるようにするかを、教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていく」ということが書かれています。また、チーム学校ということで、これからの学校は、学校だけで問題を解決するわけではなくて、学校、地域、保護者が一体となって解決を図っていかなければならないと。中学校の部活の問題においても、顧問は教員がやるのですけれども、地域の指導者がいれば、そうした方に委ねても構わないし、授業の中にも地域の方に入っていたいて、授業をしてもらう。

生徒の問題についても、なかなか学校で解決できないことがあります。例えば本校でも不登校の子が何人もいて、教員が家庭訪問しても出てこないという時に、地域の民生委員の方などに頼んで見守っていただけないかなど、そういう連携を図りながら問題を解決していくことが大事ではないかと思います。また、能力も今までのように知識だけを身につけるのではなくて、思考力を身につけて実際に社会に役立つ力をこれからの学校教育は求められており、それが21世紀型的能力ではないかと思います。

（２）ボランティア活動を経営方針に

こうしたことを踏まえて、私の学校でも社会に貢献できる人を育てるため、私の場合はボランティア活動を通して、地域に貢献する態度を育むということを経営方針の中に入れました。具体的には、それまでは生徒会を中心にしてチャリティーリレーマラソンの取り組みをしていましたが、2018年4月にボランティア部を作り、これを核として、チャリティーリレーマラソンや募金活動、地域のお祭りなどの活動に、全校で関わればと考えました。

【Ⅱ：学校の取り組み】

実践としては、ボランティア部を中心としたもの、授業、それから生徒会を中心とした取り組みがありますが、今日はボランティア部の取り組みと、授業での取り組みを中心にお話しします。

（３）ボランティア部の取り組み

ボランティア部には、1年生が10人程度、2年生が5名、3年生が5名程度所属しています。女子が多く男子は2名程ですが、1名の教員が担当して取り組んでいます。内容としては、チャリティーリレーマラソンと町内会の盆踊りのボランティア、建築フェアということになります。

チャリティーリレーマラソンについては、本年度は日本フィランソロピー協会のメニューに従って、学校での募金活動、合同ボランティア活動、東北の視察と報告会を行ないました。募金は、門前仲町の深川不動堂で、生徒とPTAの保護者にも手伝っていただき、一緒に行ないました。寄付をしてくれる人もいれば、無視して通り過ぎてしまう人もいました。文化祭の時には、生徒と親と一緒に、東北や熊本の物産を販売しました。結果として、募金活動では9万2200円、物品の販売が8万9000円となり、約20万円近くの寄付金が集まりました。



町内会の盆踊りの手伝いについてですが、地元の冬木町の盆踊りを本校で行なう際の屋台の手伝いや会場の設営、片付けなどに、ボランティア部が呼びかけて64人の生徒を集めて参加しました。射的や輪投げ、焼きそば、焼き鳥、たこ焼き、磯辺焼きなどの出店を、地域の人と一緒にやって行ないました。そのほかにも深川のお祭り、平成29年の富岡八幡宮の例大祭、30年の深川神明宮のお祭りなどには卒業生も来ました。そういう面では、本校は人情味が溢れ、保護者の方も地域の方も、何とか学校を支えようと応援をしてくださっています。

「建築ふれあいフェア」というのは、本校の前のPTA会長さんが、東京都建築士事務所協会が「ふれあいフェア」を毎年やっているので、深川第二中学校も参加してくれないかと声がかかり、ワークショップ体験をしています。棒で物をつくるというワークショップをしながら、これからの街づくりなどについて話し合いました。

（４）授業の取り組み

授業での取り組みでは、どこの学校でも中学2年生が行なう職場体験学習を紹介します。職場体験は、働く意義とか将来の生き方を考え、また夢や希望を持つことができる機会として多く行われています。本校の場合は7月28日から30日の3日間、45箇所に生徒128名が別れて、事務所の中で職場体験を行います。この職場体験先も、日本フィランソロピー協会にご紹介いただいて、平成30年度はりそな銀行や、NECソリューションイノベータで実施しました。

【Ⅱ：学校の取り組み】

りそな銀行では、1億円を持ってみたい資金を増やすゲームをしたり、貸金庫をのぞいて見たりという体験をさせていただきました。なかなか町の銀行の支店ではこうした体験が難しかったので、できるようになったのは大良かったと思っています。

新木場に本社があるNECソリューションイノベータでは、そこで雇われている障害者の方が、企業の中でどのように働いているのか、また障害者の方々が作ったパンを会社のお昼休みに売る際、どうやったらみんなに買ってもらえるのかを考える体験活動をして、働く意義を考えました。



職場体験のほかに企業との取組としては、6月にりそな銀行の社員が見えて、中学3年生にお金に関する「マネー教室」を行なっていただきました。「スマートフォンを購入しよう」をテーマに、どうすれば購入できるかを自分たちで考え、契約の仕方なども考えました。こうした取り組みは、授業の1時限分を各クラスで行ないましたが、授業が単発になってしまっていて継続しな

かったのが課題です。

現在、三菱地所さんと、2019年度の6月～7月にかけて、「東京のまちづくりを考えよう」をテーマに、どのように授業を行なっていくかということ本校の教員や日本フィナンソロピー協会さんと一緒になって考えています。具体的には事前ワークや講習について考え、社会科の授業で取り組もうとしています。単発にならないよう今度は計画的に行おうと思っています。

また生徒会が中心となり、江東区で実施された青少年委員の方々とのグループ討議に参加し、今年度はいじめの防止について話をしました。青少年委員の方も中学生の実態を知ることができたのではと考えています。

全体的な成果と課題としては、社会人大人と接することができ、現実の社会を知ることができ、また考えるようにもなりました。ただ、ボランティア部が中心となっているので全校的なムーブメントになっていないのが私の力不足ではと考えております。また、単発の授業なので、成果が「面白かった」といったもので終わり、次に繋がっていかないことが課題です。この課題を受けて、三菱地所さんの授業については、もう少し考えながら生徒たちが東京について体験を通して考えることができるような授業を作っていきたいと考えています。

(了)

6

ボランティア活動が高校生の成長を促す 大阪府立長吉高等学校／大阪府立東住吉高等学校

神山 和英氏（大阪府立長吉高等学校 教諭）

富田 年久氏（大阪府立東住吉高等学校 教諭）

【2018年12月22日（土）大阪セミナー】

（１）長吉高等学校でのチャリティーマラソン ～阪神淡路大震災からネパール支援へ

富田：1995年、長吉高校に務めていた時に高校生たちと「チャリティーマラソン」を始めました。そのきっかけは、阪神淡路大震災です。それまで、ボランティアというのは町のゴミ拾いぐらいしかイメージはありませんでした。被災者のための募金活動をしようとした時、ただ寄付を集めるのではなく、みんなで体を使って汗をかこうと文化祭の時に24時間走り、その総距離、1キロにつき1円の寄付をもらおうと考えたのが始まりです。生徒が頑張って走れば走るほど募金が増えるということです。2年ほどこれを継続しました。



その後、長吉高校には外国の子も結構いまして、ネパールに学校を寄付しようと思いました。そのため24時間リレーマラソンのノウハウを使い、1998年に日本横断リレーマラソン500kmを実施しました。和歌山県の潮岬から京都の丹後半島経ヶ岬まで500キロを先生と生徒でつなぎ、途中、市町村の役所や学校を訪問し、寄付を集めました。各市町村や学校には、事前に訪問することは伝えますが、寄付金を欲しいとは言っていませんでしたが、皆さんそれぞれちゃんと集めてくれていて、総額340万円の寄付金が集まり、ネパールに3校の学校を建てることができました。実は実施費用も約300万円かかり、それに関しては教員が出したり、ほかに企業から実施費用の寄付金をお願いして集めました。

2001年に「先生、もう1回やろう！」という話になり、今度は逆の経ヶ岬から潮岬までの500kmを走って4校目の学校を作りました。この話は、英語や社会の教科書にも掲載されました。

現地からはたくさん手紙が届きます。「学校を作ってくれてありがとう」という手紙も来ますが、実は「私たちはお金がなくて学校に行かない」という手紙が届き、募金の目的を学校の建設から奨学金に変え、われわれ独自の奨学金制度を作り、24時間リレーマラソンをそのために実施するようになりました。



長吉高等学校の寄付により建てられた学校

（２）高校生の成長を促し、卒業後のネットワークを広げる行事に

神山：私は2002年に長吉高校へ転勤してきて、2001年に行なわれた2回目の500kmマラソンにわずかの差で参加できませんでした。「今年もう一ぺんやって！」と富田先生にお願いしたところ、「あれは大変でできない」と。「それなら距離は半分でもいいから」と実施したのが「チャリティーツアーオブ淡路島」です。実は、これは公立学校の課題ですが、元々

【Ⅱ：学校の取り組み】

500キロマラソンを一緒にやっていたメンバーみんなが転勤してしまい、そのメンバーで夏に淡路島にみんなで走りに行くという予定があったのですが、私があまりにも「リレーマラソンをやってほしい」と言ったものですから、それをチャリティーリレーマラソンに変、250kmのマラソンを実施しました。



2年目からは、我々の仲間が転勤した大阪府内の学校と、淡路島にあるすべての県立高校に協力を求め、各学校でネパールの子どもたちのための募金をやってもらいました。普通だったらそのお金を車で取りに行きますが、高校生だから自分の足でと、長吉高校から走って伺い、お金をいただきます。お金を受け取ったら、また次の学校に走って行く。この時、淡路島にある全部の県立高校が

参加してくれたので、結果的に淡路島をぐるっと海沿いに一周しました。全部集め終わると大阪に帰ってきて、長吉高校に帰る道中また様々な高校に寄ってお金をいただく形でお金を集めています。

最初はボランティアの楽しさを教えようということで富田先生も始めたのですが、実際やってみると、例えばチャリティーツアーオブ淡路島は夏休みの3日間を使って実施しますが、行った時と帰ってきた時では生徒の顔が本当に変わります。そのことに私自身もすごく感動し、この行事は意図しなくても生徒を育てる力がある、自尊感情を育てることができるということに気づきました。

長吉高校はエンパワーメントスクール、学びなおしの学校と言いまして、中学時代に勉強が苦手だった子たちが集まってくる学校です。多くの生徒が自分に自信を持てず、自己肯定感が低い。ですから、自尊感情を育てるといえるのは本校で本当に大切なことで、富田先生からこの行事を受け継いでいてから、そのことを一番大切に考えて取り組んできました。

行事の段取りは実は私の方でつけてはいるのですが、あえて、生徒に相手の生徒会へお願いの手紙を書かせることから始めて、すべての実務的なことを生徒にやらせます。準備段階から全部、生徒たちがやることで、最後250kmを走り終えたときは本当に大きな達成感を得ることができます。その上、集めた寄付金は500名を超える子どもたちに奨学金として送ります。その事実を知ると、自分たち高校生でも世の中の役に立つことが分かり、本当に多くの生徒たちの顔が変わります。それに励まされて、私も大変でしたが、ずっと続けることができました。

実は私も2年前に定年退職をして、この行事が途切れそうになったのですが、卒業生たちが長吉高校の伝統行事が無くなってしまうと大騒ぎになり、同窓会主催で実施してくれました。その先輩たちの姿を見て、2018年は現役の生徒たちが文化祭でチャリティーマラソンを復活させました。私の意図したことではありませんでしたが、マラソンを通じたネットワークが卒業後も生き続け、その卒業生たちは現役生にとってはすごく良い見本、ロールモデルになっています。ボランティア活動だけでなく、大学生の先輩を見て、大学に進学をしようと思う子たちがいたり、社会人になっている人の話を聞いて、就職の参考にするなど、そういうところまで進んできました。

【Ⅱ：学校の取り組み】

（３）東住吉高校における新たなチャリティーリレーマラソン

富田：私は2007年に転勤して学校が変わりましたが、長吉高校のチャリティーリレーマラソンは、神山先生が来てくれたので引き継ぎました。多くの場合、公立高校は先生が変わると行事が終わってしまうことが多いので、今ある奨学金制度をさらに発展させ、次代わる学校のことも考えて、奨学金制度を「ジャパンハズスカラーシップ」と名前を変えて転勤しました。この奨学金制度はNGOに運営してもらう形になっています。

卒業後は就職する生徒が多い長吉高校に比べ、東住吉高校はほとんどの生徒が4年制大学に進学します。自分のこれまでの活動を紹介したところ、「私たちもやりたい」と言ってきたので、転勤した年からチャリティーマラソンを始めることができました。

本校のチャリティーマラソンは外を走らずに学校のトラック250mを400周、100kmを走ります。クラブ活動が盛んで、夏休みにクラブを休むことが出来ないため、秋の1日を取りまして実施します。募金方法としては、近隣にある大阪で一番大きい針中野商店街に生徒が立ち、「チャリティーマラソンに賛同してくださる方、寄付金をください」と大きな声を出し、お金を寄付していただきます。1年目は少なかったですが、12年間継続していると根付いてきて、地域の方が寄付金をたくさんくれます。毎回3,000人くらいからいただき、今年の寄付額は約60万円です。

チャリティーリレーマラソンの当日、スタートには300人くらいが並びます。運動系だけでなく、軽音学部や吹奏楽部、家庭科部なども。このイベントは基本的にはボランティア部の行事で、強制力の働く学校行事にはしていません。学校でやってはいるのですが、みんなが自由に参加できる形にして、自分のクラブの空いている時に走りに来る、という感じにしています。



寄付金が集まっているので、雨でも実施します。実施するのは11月の寒い時期ですが、面白いのは、生徒たちは過酷な条件ほど元気が出ます。ネパールの子どもたちのため、という目的があるので。僕らのボランティア活動の一番の特徴は、目に見える支援を目的にしているところ。ですから、日本赤十字社やユニセフなどの大きな団体に送るのではなく、ネパールにいる子どもたちの写真を見せ、この子らに寄付金を送るのだと伝えます。東日本大震災の時も、教育委員会からは寄付金を日本赤十字社に送るよう通達が来ていましたが、本校は陸前高田市の高田高校に一点絞りで実施しました。子どもたちは目に見えるほどやる気が出ます。

また、地域からお金を集めることも特徴で、地域の方も「ここの学校はこういうボランティア活動をやっている。応援しよう」となります。マラソン当日も、途中からの参加が出来るので「走らせていただけますか？」と参加してくれます。また当日、PTAが生徒たちの頑張りを嬉しく思って食事を800人前くらい作ってくれます。地域の子どもたちも食べに来られるし、生徒も喜びます。地域と密着し、連携しながらできているのが12年間続いている成功のポイントだと思います。伝統行事になりつつあります。集まった寄付金は、13年間で1000万円近くになりました。

【Ⅱ：学校の取り組み】

（４）学校行事をすべてボランティア活動に

富田：学校行事すべてをボランティア活動にしようと思っています。本校は体育祭も有名で、約3,000人のお客さんが来ます。それも自己満足ではなく、人のために行なう体育祭。例えば、東日本大震災時は陸前高田市の高田高校のために実施しました。東北が悲惨な状況の時に体育祭を行なっているのか、という雰囲気もありましたが、我々は体育祭を頑張ることとでエネルギーを届けようと考えました。

チャリティーリレーマラソンは今年で12年目ですが、これまで13回実施しています。その理由は、東日本大震災時です。やはりこういう道具があると動きが早い。生徒がすぐに「先生、チャリティーマラソンしよう」と言い、4月4日に実施しました。準備期間の2～3週間の間に駅前で募金活動を行なうと、やはり反響が大きく、その時点で約130万集まり、その後体育祭で集めて全部で200万円くらいになりました。

本当は生徒も一緒に陸前高田市に行くはずでしたが、放射能が危ないと校長に止められ、物理の先生から線量計を借りて僕一人で行きました。線量を測りながら福島駅に着いたら、線量が東京から10倍の数値にボンと上がりました。そこにお子さんを連れのお母さんがいましたけれど、何も言えませんでした。帰りに郡山市を通るときも、数値がボンと上がりました。このような現状だということを、高田高校の頑張りも含めて帰ってから授業しました。授業でフィードバックすることによって、生徒たちがまた何か一歩踏み出せるというのが本校の取り組みです。

このような形の活動は学校の外に出ないので、お金はあまりかかりませんから、他の学校もできると思います。この活動が大阪中に広がれば良いと思っていますが、現実には難しく、なかなか広まらないです。先生方にも苦勞かけるし、反対する管理職もいます。けれどもやっていくと生徒たちの成長につながるし、生徒たちには絶対一生残ると思いますので、継続していきたいと思っています。

（５）目的意識を育む取組み

富田：本校では、チャリティーマラソンを実施する前に、1年生全員を集めて私が授業をします。ネパールの教育現状や、先輩たちはこういう形でやってきたという内容で、一時間以上、体育館で僕の話聞き、目的意識を持ち、前向きに取り組むことができます。

もう1つ取り組んだのは、実際にネパールの子どもたちに会いに行くことです。これまで3回ほど実施し、去年も行きました。渡航費は生徒の家庭が負担しますが、30人くらいが参加します。現地の小学生、1年生から10年生（高校1年生）に会いに行き、英語で会話をしながら、その生活も見ます。例えば、ホテルはきれいなのですが、お風呂に入ろうとお湯をひねったらバスタブが茶色になる、もちろん水は全く飲めない。そういうところなのですが、生徒たちは言います。「先生、あの子らの勉強できることを幸せに感じている顔を見た？」。



目が爛々と輝いています。「先生、私らは勉強できるのが当たり前と思って、学校へ行くの嫌と思ったときもあったけど、やっぱり良く考えなければあかん」「これを帰って、同級生に伝えるのが仕事やと思うわ」という形で、実際に見ることで変わっていきます。どこの高校生でもそうだと思いますが、このような機会をたぶん欲しています。教師が提供し、後は生徒たちが育てていきます。生徒らの成長が良く見られるのが本校の行事だと思います。

【Ⅱ：学校の取り組み】

（６）支援の輪を広げるために

富田：残念ながら、私もあと1年ちょっとで定年で、次世代につなげていくことが大きく残された課題です。ネパールで困っている子は山ほどいるので、本校から小学校の教員になる人間も多いので、小学校も巻き込みながら継続できればと考えています。

ネパールを長年支援していると「なんでネパールだけやねん！」って寄付金を集めている時に町の人から言われます。もちろん東北支援も行なっています。軸足はネパールに置きながらも、日本の被災地も支援する気持ちを持ちながら高校3年間過ごした生徒は、やはり大学に行ってもボランティアを継続しています。大人になっても変わっていきます。それが今の教育に必要なところだと思います。長吉高校には長吉高校の良さがあるし、本校には本校の良さがある。その学校に応じたことをやりながらも、そういう心を育てていくのは今の教育に必要なことだと思います。

（７）地域・企業とのつながり

神山：活動が盛んになりますと、地域から認めてもらえて、「ボランティアが盛んな高校」という評価をいただけるようになり、色々な声かけをしてくださるようになりました。例えば身近なところで言うと、町内会の大和川清掃。本校は大和川のほとりにあるのですが、川の清掃を町内会がやっておられたところ高齢化進んで大変だということで、ツアーメンバーを中心に生徒が行ってお手伝いしました。また、市営住宅や団地の大掃除などにも手伝いに行き、さらには地域の祭りにまで声がかかるようになりました。

実は、そのことが生徒にもすごくありがたい。地域の人が「ありがとうな」って一言言うてくださるのは、生徒の言葉で言うと、「私ら大事にされているな」ということ。本校みたいに自信のない子たちには、小さな成功体験です。私たちも日常の中で、ちょっと何かあったら褒める、色々な場面で褒めていくということをしています。そのような小さな小さな成功体験を積み重ねることによって大きな自信につながるので、地域が関わってくださることはすごくありがたいです。

企業さんに関しても、本校は就職の多い学校なので、就職のシーズンの前になると色々な企業を訪問して求人票のお願いに上がります。その時にチャリティーマラソンが話題になってすごく共感していただき、大きい額の寄付をしてくださったことがあります。そのことを生徒に言うと、生徒はすごく感動します。と言うのは、生徒たちにとって会社というのは社会です。先ほど富田先生が「目に見える」という言い方をしましたが、目に見える社会というのは会社なのです。その会社から多額の寄付をいただいたということは、自分たちは社会から評価されたということ。これはすごく大きな成功体験でした。そういう形で、地域、企業さんに育ててもらったなというところがあり、本当にありがたいと感謝しております。

（了）

【Ⅱ：学校の取り組み】

7

福岡市 堅粕交通少年団 飲酒運転ゼロ大作戦 福岡市立堅粕小学校

二田水 祐倫氏（福岡市立堅粕小学校 主幹教諭）

【2019年3月10日合同報告会】

堅粕小学校は、博多駅から歩いて3分という、おそらく日本一駅に近い小学校です。そのことから、やはり交通量が多く、交通安全に対する意識を高めることが、子どもの安全を守る上で大切になっております。今回は、そうした活動を行なっている堅粕交通少年団についてご報告をさせていただきます。堅粕交通少年団団長（6年生女子）が作った原稿を代読させていただきます。

（１）交通安全に向けた堅粕交通少年団の取り組み

堅粕交通少年団は、今から37年前の1982年1月に、団員の自主的な活動を通して、交通安全に取り組むことを目的に作られました。私は3年前に入団しました。入団式には、私たちを指導して下さる、堅粕交通安全推進委員会、博多区役所、博多警察署、堅粕小学校PTAのみなさん、そして先生方にも参加して頂きました。



堅粕交通少年団には、できた時からある3つの約束があります。「1. 交通ルールを守り、人に迷惑をかけません」「2. お互いに協力し合い、健康な体と心を育てます」「3. 交通安全を進める活動を通して、明るい街作りに協力します」。私たち団員は、この3つの約束をいつも心がけて、活動をしています。

毎週月曜日の朝には、学校の正門であいさつ運動に取り組みます。20分の間に、500人くらいの人たちが通ります。挨拶すると、黙って通る人もいますが「おはよう」「頑張ってるね」と言ってくれる人もいて、嬉しくなります。私たちの学校の周りは車がたくさん通るので、交通事故が心配です。それで、あいさつ運動の時は、「安全運転」の旗を持って呼びかけています。私たちの呼びかけで、交通事故がなくなると嬉しいです。月曜朝の活動では、あいさつ班と清掃班の2班に分かれて活動をします。学校の周りを1周すると、たくさんのゴミが集まります。博多駅が近く、観光客も多いので、少しでも綺麗な街になるように頑張っています。活動が終わると反省会をします。一緒に活動してくださる地域の方から、「挨拶の声が小さい」とか「気持ちを込めて」とか言われることがよくあるので、気をつけたいと思います。

毎年夏休み前には、福岡県交通安全協会と福岡県警察の主催による、「交通安全子ども自転車大会」に参加しています。これは、自転車競技を通じて、小学生に自転車の安全走行に関する知識と技能を身に付けさせ、交通事故を防止しようとするものです。

今から13年前に、とても悲しい飲酒運転事故が起きました。飲酒運転の車に、追突されて、5人家族が乗った車が海に落ちて、3人の小さな子どもたちが亡くなりました。福岡市では、この事故をきっかけに、飲酒運転をなくすための活動が始まりました。その1つが、飲酒運

【Ⅱ：学校の取り組み】

転撲滅折り鶴プロジェクトです。毎年夏休み前に、交通少年団が、全校のみんなに呼びかけて折り鶴を折ります。1年生には、6年生が教室まで行って、折り方を教えます。みんなで折った鶴は、代表が博多区役所を訪問して、博多区長さんに手渡します。

このように飲酒運転をなくすために活動を続けていますが、残念ですが、今でもなくなりません。福岡県では、3人の小さな子供達の命を奪った平成18年の事故の後、飲酒運転は少しずつ減っていますが、まだ、ゼロではありません。平成23年には、マラソン大会の練習をしていた高校生が、飲酒運転の車にはねられて亡くなりました。亡くなった高校生のお母さんである山本美也子さんは、事故の後、飲酒運転撲滅を一生懸命呼びかけてこられました。2年前には、堅粕小学校に来て、全校生徒に話をして下さいました。でも、飲酒運転はなくなりません。

（２）飲酒運転撲滅を目指して

私たちの力で飲酒運転をなくすために、飲酒運転ゼロ大作戦に、取り組むことにしました。まず、博多警察署の方に、堅粕公民館に来て頂いて、福岡県内で、飲酒運転がどれくらい起きているかについて、お話をしてもらいました。そして、お話を聞いた後、飲酒運転をなくすために、私たちができることを、2つのグループに分かれて考えました。チラシを作って、みんなに配る。ポスターを作ってみんなが通るところに貼る。新聞に書いてもらう。テレビのニュースで放送してもらう。安倍首相にお願いするなど、いろんな意見がでました。

第2回研修会には、山本美也子さんに、公民館に来てもらってお話をしてもらいました。飲酒運転の事故で、お子さんを亡くすという悲しい体験をされたのに、とても優しく私たちに話して下さいました。この日も私たちができることについて、考えを出し合い、付箋紙に出し合いました。チラシやポスターなど、1回目と同じ考えも出されましたが、プラカードを持つとか、バスやタクシー、お酒のパッケージに書くとか、新しい考えも出ました。新聞広告や雑誌を作る、なども出ましたが、お金がかかり過ぎるので、難しいと思いました。



（３）活動資金を得るための募金活動

どれもこれも一度にはできないので、今年は1回目にも出た、チラシとポスターを作ることにしました。それを聞いた先生が「活動に必要なお金はどうするの?」と言われました。すると誰かが「募金」と言いました。これまで、鶴を折る折り紙も、先生からもらっていたので、私たちの活動に必要なお金を募金で集めることはいいアイデアだと思いました。私たちの話し合いを聞いておられた山本さんが、「募金箱なら貸しますよ」と言われたので、借りることにしました。この日は、最後に山本さんと一緒に、写真を撮りました。とてもいい記念になりました。

【Ⅱ：学校の取り組み】

第3回研修会は、冬休みの前日の12月21日に行なわれ、まず公民館に集まり、その後歩いて5分のところにある、博多駅周辺で募金活動をすることにしました。公民館には、校長先生や地域の方、博多区役所、博多警察署の方が来られて、私たちの活動を応援してくださいました。募金活動は、博多駅の博多口と、筑紫口の2箇所に分かれて、30分くらいの時間で行うことにしました。山本さんが貸してくださった募金箱は、集まったお金が見えるように、透明になっていました。たくさん集まったらいいなと思いました。

プラカードは、本当は私たちが作らないといけないのですが、時間がなく、先生にお願いしました。プラカードには、募金をチラシやポスター、千羽鶴に使うことも書いてもらいました。



募金活動を始めましたが、最初は入れてくれる人がいませんでした。博多駅にはたくさん人がいるので、すぐ募金が集まると思っていましたが、そんなに簡単ではありませんでした。すると、一緒に立ってくれていた、西日本シティ銀行の方が「もっと大きな声で呼びかけないと伝わらないよ」とアドバイスをくださいました。そうだと思います、勇気を出して「飲酒運転をなくすために、募金をお願いします！」と

大きな声で言いました。すると、入れてくれる人が少しずつ増えてきて「頑張っているね」と声をかけてくれる人もいました。優しいような高校生のお兄ちゃんも、百円玉を募金箱に入れてくれました。

募金活動が終わって公民館に戻り、私と2人の副団長と3人で集まったお金を数えました。募金総額は、なんと3万1,516円。20分くらいで、こんなに集まるとは思いませんでした。募金してくれた人たちに、感謝したいです。

私たちの募金活動を、西日本新聞の方が、記事にしてくださいました。「チラシ配りくらいしかできないけれど、頑張ります」という6年生のコメントが載っていました。これは、「新聞広告と同じ」「そうか、この手があるのか」と思いました。そして、私たち交通少年団の中でチラシを2つ考え、ポケットティッシュのパッケージに入れて学校の正門であいさつ運動の時に配りました。

私はもうすぐ卒業しますが、後輩たちが飲酒運転がなくなるよう頑張ってくれると思います。私も中学生として何ができるか考えます。これからも応援よろしく願いいたします。

（４）今後に向けて（二田水氏より）

交通少年団に入団することは子どもたちの自主的な行動であり、活動もよく頑張っています。決まった活動には一生懸命に取り組んでいますが、活動があいさつ運動やゴミ拾いなどのルーティーンに陥ってしまっており、それ以上の活動には消極的な姿勢が見られる時もあります。今回の発表によって、本来の最初の目的である交通安全を目指すことの大切さを再確認できました。今回は9月からの活動でしたが、年間を通して計画的にやることで子どもたちの意識もさらに変わってくると考えています。次年度も、このような活動を色々入れていきながら、子どもたちの「やればできる」という気持ちをさらに育んでいきたいと思っています。

（了）

被災者に寄り添う支援 東北学院中学校・高等学校

東北学院中学校生徒会執行部

【2019年1月26日（土）石巻セミナー】

（１）東北学院中学校・高等学校の被災状況

本校は、仙石線で仙台駅から10分程の小鶴新田駅から徒歩15分の場所にある学校です。今年で創立132年の中高一貫校の男子校で、全校生徒は約1550人程です。通学エリアは、仙台市内はもちろんのこと、角田、古川、亘理、そしてここ石巻地区と多方面に渡っています。2011年の東日本大震災では、入学が決まっていた、石巻地区の新中学1年生1名と、卒業したばかりの高校3年生1名の尊い命が失われました。

学校自体は、本震とその後の余震で一部損壊しましたが、大きな被害はありませんでした。震災直後保護者の方と連絡が付かず、学校に止まらざるを得なかった生徒の中でも、この石巻地区から通学していた生徒の保護者の方は、道路が水没したり、寸断されていたことが原因で、なかなか学校に迎えに来られませんでした。中には3週間ほど、学校内の寄宿舎で生活した生徒もいました。また学校再開後も、仙石線が不通であったため、しばらくの間はバスをチャーターして通学の足を確保していました。

今回の発表準備を先生と進める中で初めて震災時の学校の状況の一端を知ることができ、今後後輩達に伝えていく必要があると感じました。

（２）扇町一丁目公園応急仮設住宅「おにぎり会」との交流

私たちの学校の川を挟んだ南側に、学校行事のスポーツ大会にも使わせて頂く扇町一丁目公園があります。震災後、そこに仮設住宅が作られました。この仮設住宅は、仙台市内で唯一自治会が立ち上がらなかった仮設住宅です。その理由は、住民の方の出身地域が違っており、被災の状況が異なり、住民の方の気持ちがなかなか1つにならなかったことだと伺いました。ただ、他の仮設住宅で起きた、高齢の方の孤独死をきっかけに、住民同士が交流する機会を作ったり、支援の受け入れや調整を行うための組織の必要性を感じた有志の方が立ち上げたのが「おにぎり会」です。

おにぎり会の代表の方がずっと配信してきたブログの一部を読みます。

「ここ扇町一丁目仮設住宅は、仙台市の仮設住宅では唯一自治会のない仮設住宅です。その誕生は、女性特有の思い遣りの心でした。開所当時、色々な問題が生じ、特に、他の仮設住宅での老人の孤独死が発生したことは、住民に大きな驚きと悲しみをもたらしました。このような事態を受け、それを防止する案として、有志が集まり、集会所で食事会を開く事を企画しました。その食事会の約束事は、1つ余分におにぎりを作る事でした。この取り組みが、その後の住民同士の交流と親睦を図る好機となり、今の活動に発展しています。おにぎり会は今や、扇町一丁目仮設住宅で開かれる様々な行事の運営に関与しており、仮設住宅住民と行政や外部の支援団体とを繋ぐ、重要な役割を果たしています。最初は、全部で21棟、131世帯の方が入所されていました。」

【Ⅱ：学校の取り組み】

2011年に神戸で開催された、日本フィランソロピー協会主催「被災地復興応援チャリティーリレーマラソン」で頂いた募金の寄付先に、この扇町一丁目仮設住宅ともう1箇所、そこも私たちの学校がスポーツ大会で使わせて頂く扇町4丁目公園の仮設住宅を選び、寄付させて頂きました。仮設住宅ではクリスマス会に参加させて頂き、クリスマスソングを歌うなど、楽しく交流させて頂きました。ただ、扇町4丁目公園の仮設住宅の自治会には、会長さんが体調を崩されて以来うまく受け入れて頂くことができなくなってしまいました。一方、扇町1丁目仮設住宅の方は、代表の方が「ずっと交流を続けてくれるなら募金をいただきます」と話され、その後、マラソンでいただいた募金を活用しながら、中高の執行部が中心となって仮設住宅を閉じる2016年まで交流を続けました。



（３）1年を通じた交流活動

「おにぎり会」との交流の内容には、2つ大きな柱があります。1つ目は、物置を作ったり、清掃や雪かきをしたりという、建物と施設の維持管理のお手伝いです。もう1つは、お花見や夏祭り、芋煮会、クリスマス会、節分や3.11メモリアル行事など、年中行事を軸にした交流です。先輩たちは清掃用具などを入れる物置を作りました。住民の方に道具の使い方を教わりながら、2ヶ月ほどかけて物置を作り、除雪の道具などを入れるのに活用していただきました。また、周囲の側溝の清掃も、定期的に行ない、雪かきも生徒で行ないました。仮設住宅には高齢の方が多く、雪かきをしないと部屋の中に閉じ込められてしまうことが考えられたので、先輩たちはこまめに雪かきに伺っていたそうです。



また、先輩たちは年中行事を大切にしながら交流をしてきました。お花見では、住民の方や他の支援者の方々と一緒に、仮設住宅の中でお花見をして交流を深めました。ある年には、桜の時期に、お花見と仮設での生活の疲れを取るための温泉を兼ねた小旅行に出かけました。定義山への移動には、送迎の支援を行なう方々のお力をお借りしました。

夏祭りでは、東北薬科大学の吹奏楽部や、東北学院高校の生徒が中心となって形成されボランティアグループ「リスマイル」など、多くの支援団体と一緒に、また多くの方から支援を頂きながら、1日をかけてゆったりと様々なイベントをして楽しい時間を過ごすことができました。秋の芋煮会では、ある年度、東北学院の執行部、リスマイル、仙台城南高等学校の生徒会がそれぞれ芋煮を作り、住民の方にその中でおいしい鍋に投票していただくという企画を行い、楽しい交流の機会を持つことができました。



【Ⅱ：学校の取り組み】

東北学院はミッションスクールなので、クリスマス会の行事を大切にしました。集会所の飾りつけなどの準備は住民の方に行なっていただき、お菓子を食べたり茶を飲んだりおしゃべりをしながら楽しく過ごしました。2013年のクリスマス会では、学校の養護の先生の知人のお菓子屋さんをお願いしてオリジナルのクッキーを焼いていただき、住民の方にプレゼントしました。

節分の行事の際は、「鬼は外、福は内」という掛け声の中に、住民の方の「早く落ち着いた暮らしをしたい」という願いを感じたと、先輩たちは話してくれました。節分は、住民のお子さんが楽しんでくれるような行事でもありました。

私たちが最も大事にしてきたのは、「3.11メモリアル行事」です。オリジナルのキャンドルを手作りし、そのキャンドルに火を灯して、亡くなられた方の御霊の平安を願ったり、灯籠を住民の方と一緒に作って、祈りの時間を持つなどしました。このような機会を通して、被災者の方と住民の方、また住民の方同士の交流を図るお手伝いをしてきました。仮設が閉じる事になった2016年まで、この行事を大切に行って来ました。現在も場所を学校に移して、継続しています。



（４）多くの方々と活動とともに

これまで一緒に活動をさせて頂いた、主な団体は下記の通りです。

- ① **高校生のボランティア団体「リスマイル」**：団体の主宰者が学院高校の生徒で、メンバーに多くの学院生がいたこともあり、様々な機会と一緒に活動しました。
- ② **奈良学園大学の吹奏楽部**：学院高校の元生徒会長が同大学の職員になった縁で、演奏会を一緒に企画しました。
- ③ **チャンバラ合戦「戦 IKUSA」**：子どもたちが体を動かす機会を作りたいと考え、当時の顧問の先生のつながりで、大阪から起こし頂き、何回か企画を持ちました。参加者はみんな本気で、取り組み、体を動かししました。
- ④ **和楽器演奏グループ「ビカム」**：生徒会の顧問の先生の同級生というつながりでお越しいただきました。昨年度は学校で開催した3.11のメモリアル行事の際に演奏会を開いていただきました。
- ⑤ **神戸市立白川台中学校**：日本フィランソロピー協会のチャリティーリレーマラソンと一緒に参加した縁で、仮設住宅で一緒に活動しました。
- ⑥ **明治学院東村山高校生徒会執行部**：校長先生とのつながりで、夏休みに本校の合宿所に泊まっていただき、夏祭りに一緒に参加しました。2年間参加してくださいました。



活動の中で、このように多くの方との交流が生まれ、このことが私たち執行部の財産になっていることを改めて実感しています。交流は、仮設の集会室を会場にするだけでなく、私たちの学校に住民の方をお招きする形でも行いました。特に、文化祭の際には、送迎支援の方にもお手伝いいただきました。

【Ⅱ：学校の取り組み】

（５）仮設住宅が閉所して

仮設住宅は、2016年に閉所し、住民の方は復興住宅に移られたり、新たに家を作られたりして、それぞれの住まいに移られました。

執行部ではその後も、元代表の方を窓口に、元住人の方との交流を続けて来ました。住民の方からは、新たな住まいで周囲の方と新たな関係を作ることが難しいこと、仮設での生活は大変だったけれど、そこでの交流はとても楽しかったことを伺いました。そこで執行部では住民の方を学校にお招きして、行事を企画することを続けて来ました。ただ、昨年度のクリスマス会と比べると、お越しいただいた方の数が少なくなっています。そこで、プレゼントをお宅にお持ちしながら状況についてお話をお伺いしました。すると、例えば免許を返納されたりして、移動の手段がなくて、参加していただき辛い状況があることがわかりました。



（６）今後求められる取り組み

私たちは、今後3つの取り組みが必要だと考えました。それは、仮設住宅のコミュニティの維持、被災者の方の状況の発信、学内での情報共有、です。

まず、仮設住宅でのコミュニティの維持です。移り住まれた先でのコミュニティ作りも大切ですが、特に高齢者の方の中には、仮設での交流を懐かしく感じ、そこでのコミュニティを大切にしている方が多くいらっしゃるの、その気持ちに寄り添う必要があると考えます。学校が皆さんが集まれる場所になり、行事を企画し、都合の良い時に集まっていただくことが大切ではないかと思えます。移動の手段の確保は、例えばジャンボタクシーを貸し切るための募金活動を大なうなどの工夫を、今後していきたいと思えます。

次に、被災した方の状況の発信です。クリスマスプレゼントをお届けした際に、ある方から、戦争と同じ重みで、震災の負債を感じている、というお話をいただきました。先日発生から24年が経った阪神大震災の記事を読みましたが、未だに辛い記憶を背負い、苦しんでおられる方がいらっしゃることを知りました。仙台市内では、仮設住宅が閉じ、表面上は、震災を感じさせるものは少なくなりましたが、未だに辛い記憶に苦しんでいた、それまでの生活と一変して悩んでいる方がいらっしゃると思えます。以前、先輩は大学の先生から「震災は、地域の抱える課題を浮かび上がらせるきっかけに過ぎない」という話を聞いたそうです。地域の持つ課題、特に仮設住宅の方の状況を、募金を通して気にかけてくださった、東京や神戸の方に丁寧に伝えていく必要があると感じています。高校の執行部ではすでにそのような取り組みを始めていますので、中学校もそれに倣っていきたくと思っています。

最後に、学内での状況共有です。今回、このような発表の機会をいただき、初めて当時やこれまでのことを先生や先輩方、仮設住宅の方から伺う機会を持つことができました。被災を風化させないためにも、今後執行部だけでなく、同級生や後輩たちに伝える必要があると思えます。掲示板の活用以上にできることはないか、例えば学校の学習のため1人1台持っているパソコンを有効に活用できる方法はないかと考えたいと思えます。

（了）

石巻市立石巻中学校生徒会執行部
【2019年1月26日（土）石巻セミナー】

石巻中学校の創立は1947年4月1日、全校生徒は301名です。主な行事は運動会や群鷗祭という名前の文化祭です。また、伝統文化を感じられる本校ならではの取り組みとして、加城島獅子舞の引継ぎ活動を行なっています。群鷗祭の時期に有志生徒で結成したグループで、獅子舞に詳しい方にご指導いただきながら練習しています。今年度の群鷗祭で発表されたものの完成度は高く、とても素晴らしかったです。12月には全校生徒で百人一首大会を行なっています。毎週金曜日にゴミ拾いをしながら登校するクリーンアップ登校、という活動も行なっています。これは本校の伝説的な活動で、生徒自身で環境を守る大切さに気付いてもらうことを狙いとしています。

（1）石巻の魅力と現状

会場の皆様にとって、石巻の魅力とは何でしょうか？ 私たちが思う石巻の魅力は、自然が豊かであること、海の幸が豊富なこと、文化が発達していることです。自然については海・山・川といった素晴らしい絶景に恵まれており、景色もとても綺麗です。日和山公園など絶景を味わえる場所では観光に来る人も多いようです。

去年の夏には白浜海浜浴場が8年ぶり本格オープンし、多くの人で賑わいました。海の良いところは、海遊びを楽しめることだけではなく、海産物がたくさん取れることも、とても貴重な魅力です。親潮と黒潮の潮目である石巻は様々な種類の海の生き物が住む最高の漁場です。それらを加工品にするのも盛んで、笹かまぼこのほか、缶詰やつくだ煮など、色々なものが出回っています。

もう1つの魅力は、漫画などの世界に直接触れられることです。石ノ森萬画館は石巻でもポピュラーな観光地と呼ばれるのにふさわしく、その世界観を求めて県外から多くの人を訪れます。ほかにも「武道の町石巻」とも呼ばれています。多方面に広がる石巻の見事な文化は強く誇るべきもののなのです。

石巻市立石巻中学校生徒会

1. 石巻の魅力と現状

魅力 ・自然が豊かである

・海の幸が豊富である

・マンガと武道の街



IJH Student Council

石巻市立石巻中学校生徒会

1. 石巻の魅力と現状

現状 ・復興の陰で遊ぶ場所の減少

・震災への関心の低下

・石巻の良さが若年層に伝わっていない

IJH Student Council

その一方で石巻には課題もあります。遊ぶ場所の減少や震災への関心の低下、石巻の良さが若年層へ伝わっていないことです。

東日本大震災から8年が経ち、復興が進んでいの中で、もともと公園だった場所に新しい建物ができるなど、子どもたちの遊び場が失われています。また、震災の記憶が私達の生活から薄れつつあるように思います。あの日のことを語り継いで

【Ⅱ：学校の取り組み】

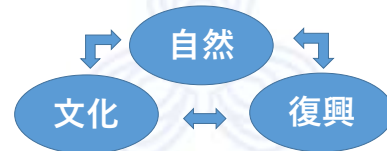
いくのは残された私たち若い世代の使命です。しかし今、その若い世代に石巻の良さが伝わっていません。今回石巻中学校生徒会で石巻に良さについて話し合ったときも、中々意見が出てきませんでした。石巻の良さが伝わらず、このまま石巻から離れてしまう人も中にはいます。

（２）３つの面での理想像と提案

以上のことを踏まえて３つの面での理想像を考えました。キーワードは自然・文化・復興の３つです。これらが１つずつではなく、互いに結びつくことで力が発揮されることを目指したいのです。これを実現するには何をすれば良いのでしょうか。

石巻市立石巻中学校生徒会

２．３つの面での理想像



IJH Student Council

① 文化

石巻の文化を絶やさないためには、その知名度を高める必要があります。石巻の文化を教え、伝える場所を作れば、目や耳で感じ取ったり、実際にやってみることで、そこに行くだけで大きな学びを得ることが出来ると思います。例えば文化館のような施設を作り、武道や絵などの豊富な文化を一堂に集めれば、何度見ても飽きないような素敵な場所ができるはずです。展示だけでなく、武道を体験できるところを用意するのも効果的です。

今ある文化を活かすだけでなく、石巻に住むみんなで文化の交流を行なうことも大切です。様々な人が作り上げた作品の展示を行うことで、人と人の間に心のつながり生まれと思います。このような石巻の文化はいつまでも受け継がれるものであってほしいです。

そしてこの文化の中には、石巻の大きな影響を与えてきた震災の影響も含まれます。皆が助け合って歩んできた復興への道を見直し、未来へ伝えていくことはとても重要です。これについては、復興まちづくり・情報交流館などの場所は既にありますが、その存在があまり認知されていないことが問題です。これを解決するため、チラシやSNSの力を借りるべきです。大型商業施設などでチラシを配れば石巻やその周辺に住む大勢の人に情報が伝わります。さらにSNSを利用すれば世界中の人に石巻のことを発信できます。実際に来てもらえなくても、その情報によって1人でも多くの人に震災や石巻について知ってもらうことが出来、また来てもらった人にはSNSを使ってその情報をさらに拡散してもらうことも考えられます。このような宣伝を行うことで石巻の文化は確実に高くなります。

② 復興

復興による遊び場の減少についても対策しなければなりません。公園や屋内外の運動場など気軽に体を動かせる場所を設けるべきです。そうすれば多くの人の運動不足が解消され、石巻で深刻になっているこの問題の改善にも繋がるかもしれません。みんながスポーツを楽しむためにも運動できる場所を充実させるべきだと考えます。

③ 自然

石巻の豊かな自然をまちづくりに反映させることはできているでしょうか。せっかく自然があっても活かしきれていないのは大変もったいないことです。それを改善するべく、今の自然を活かしたイベントを行ったり、施設を作ったりすることを提案します。

例えば、堤防や水面をスクリーンとして高見沢などでプロジェクションマッピングをすることです。復興の力でできた堤防や自然の象徴である川に石巻の絶景・歴史・文化などが

【Ⅱ：学校の取り組み】

映し出される、これこそまさに自然・文化・復興の融合だと思うのです。このイベントでは古くから残る、景観や堤防を最先端の技術が結び付いています。このようなイベントをたくさん行えば幅広い年齢層が楽しめるはずです。

施設としては、石巻の美味しいものを食べて窓をみると海が広がっているというような「堤防レストラン」はどうでしょうか。食文化も自然によって生み出された自然の一つです。魅力として挙げた石巻の海産物やその加工品などを多くの人に食べてほしいのです。石巻に住んでいても外食をするのならファミリーレストランという人が多く、地元のものを食べる人が少なくなってきました。このままでは、石巻の食文化を知っている人が少なくなり、やがて途絶えてしまいます。そうならないようにするには、「堤防レストラン」のような施設を作ることで、石巻の食の良さを広めていくべきです。

また、石巻の食を作る側にも工夫が必要だと思います。石巻の有名な食べ物には、水産加工品や石巻焼きそばがありますが、この他にはあるのかと問われるとすぐには言えない人も多いのではないのでしょうか。ここで大切になってくるのは食文化に新たな要素を取り入れ、更に発展させることです。石巻の食べ物といえど聞かれたときにすぐに思いつくようなものがもっと開発されることが望ましいです。

その動きはもうすでに始まっており、平成26年度から雄勝地区ではオリーブが栽培されています。復興庁に紹介され香川県の団体から支援を受けて始まったこの事業は今年で5年目を迎えました。この栽培はまだ試験段階ですが、将来的にはオリーブオイルの商品化を目指しているそうです。これは石巻の自然環境を活かし、その食文化に新たな可能性を見出してくれる素晴らしい事業だと思います。このような食文化の取組が沢山行われることで石巻の食文化は今まで以上に進化することでしょう。その進化した石巻の食文化が広まることを祈っています。

これらの自然・文化・復興の3つの要素が融和することによって理想的な街づくりができると考えます。

（３）「復興に向かって自然と文化が共生する町」へ

最後に大きな理想像を掲げるとするならば、「復興に向かって自然と文化が共生する町」になってほしいということです。今までの提案は3つの結びつきを最も重要なポイントとしています。それによって古くからあるものも新しいものも、大切にしまちづくりができ、全ての人が心地よく過ごせる石巻になるはずです。そして未来の石巻がどのように成長していくかは若い人達にかかっています。特に、プロジェクションマッピングのような技術を要する取り組みでは若者の力は必要不可欠です。そんな若年層が好きになれる石巻こそ発展していける石巻なのではないのでしょうか。私たちもその若者です。これからの石巻の担い手になるという意識を強く持ち、地元のために何ができるかを考えながら行動していきたいと思います。

（了）

石巻市立石巻中学校生徒会

・雄勝地区でのオリーブ栽培



10 高校生国際フォーラム in 石巻西高等学校

宮城県石巻西高等学校

【2019年1月26日（土）石巻フォーラム】

1. 概要

災害と防災という人類が抱える共通のテーマについて、国内外の高校生がその取り組みや解決方法について発表し討論する。各国の発表後は、本校がまとめを行ない、共同宣言を採択する。フォーラム形式を採用し、本校の一般生徒・保護者等が参加する。また、本校生徒との交流会を行なうとともに、被災地の復興の現状を体験するツアーを行なう。

2. ねらい

グローバル化が急速に進む中、高校生には国際社会の一員として広い視野を持ち、主体的に考え、発信し、行動できることが求められている。石巻西高等学校の生徒がさらに飛躍するためにこのフォーラムを開催し、世界から招いた高校生の意見交換を通じ、国際社会で活躍できる人材の育成を目指す。また、東日本大震災の被災地甲として、防災教育について生徒全員で取り組んで来た活動の成果を世界に発信し、役立ててもらうとともに、現在の復興状況を見てもらう。

3. 期日

- 第1回 2016年11月14日（火） 会場：石巻専修大学
- 第2回 2017年10月31日（火） 会場：石巻西高等学校
- 第3回 2018年10月30日（火） 会場：石巻西高等学校

4. 主催：宮城県石巻西高等学校（単独事業）

後援：宮城県教育委員会 石巻日日新聞 テイラーアンダーソン記念基金

5. フォーラム参加高校と発表の概要（2018年度）

「災害と防災」について、過去3年間で振り返りながら発表する。

（1）「竜巻災害からの復興」

（ジョプリン高校：アメリカ合衆国ミズーリ州ジョプリン市）

2011年5月22日、米国ジョプリン市を巨大な竜巻が襲った。死者161名、負傷者は少なくとも1,500人以上、同市の建物の約3分の1にあたる200戸以上が全半壊した。竜巻は、最大風速88メートルで同市中心を駆け抜け、縦6.4キロ、横1キロ以上の範囲を破壊した。この甚大な被害からの復旧を遂げた一番の要因は、ジョプリン市民一人ひとりの復興への熱い思いと強い決断だった。

（2）「20180206深夜 台湾華蓮（ホウアリエン）地震」（ナンニン高校：台湾台南市）

2018年2月6日23時50分ごろ、台湾東部最大の都市華蓮（ホウアリエン）を最大震度7（M6.4）の巨大地震が襲いました。この地震により7階建てのマーシャルホテル（統帥大

【Ⅱ：学校の取り組み】

飯店）や、12階建ての雲門翠堤ビル、そのほかに民家41棟が倒壊する被害が発生しました。17名が亡くなり数百人が負傷しました。災害すべてが避けられないものではありません。建物の安全性の確認、自信や家事そして津波に備えて十分に注意を払うことで減災に努めましょう。

（３）「プラスチック汚染から地球を救え」（ムンジョン高校：大韓民国ソウル市）

韓国のプラスチック汚染が進んでいる。どうすればプラスチック汚染を止められるのか。プラスチック製品を使わない方法・減らす方法はあるのか。行なっている試みを紹介します。プラスチックごみによる環境汚染を食い止めましょう。

（４）「東日本大震災からの教訓 ～伝える 備える～」（宮城県石巻西高等学校）

本校主催のフォーラムも今年で3年目、最終回となりました。2011年未曾有の大震災が我が故郷宮城を襲いました。当時石巻西高校は避難所、遺体安置所といったつらいことも経験しました。校内外での防災活動を海外の高校生と共有したいと始まった本フォーラムの3年間を振り返ります。



6. 共同宣言（2018年度）

- 私たちは世界の人々が直面している災害について学び解決策を提案していきます。
- 私たちは世界中の同世代の若者と災害について意見を交換し、積極的に考え行動していきます。
- 私たちは国際社会の一員として未来に向けて世界中の人々と友好関係を築いていきます。
- 再び大災害に直面した時私たち4校は助け合い今後も国際交流を続けていきます。

7. その他（2018年度）

- 宮城県石巻西高等学校：昭和60年4月創立 14学級の全日制普通高校 校長 菅野定行
- 生徒数536名（男208名、女328名） 生徒の進路 9割進学 1割就職（公務員含む）
- 生徒の95%が石巻地域 開校以来の学校目標は国際理解教育の推進
- 国際高校生フォーラムの後、海外高校生も参加して避難訓練、午後から防災体験学習
- 2018年度参加人数615名（教職員55名、保護者10名、生徒536名、海外生徒引率6名、来賓7名）
- 被災地の高校初の試みで3回目の開催。今回が最終回だが、3校とは姉妹校として今後も交流を続けたい。

（了）

